ロドスのアポロニオス　(4)

——非ホメーロス語彙の研究　その一——

髙　橋　通　男

アポロニオスの叙事詩「アルゴナウティカ」はホメーロスの語彙を基調とした作品である。即ち，ホメーロスの模倣なのである。しかし，単純な模倣ではなく，imitatio cum variatione 及び oppositio in imitando と呼ばれるヘレニズム時代の叙事詩に特有のテクニックを駆使した叙事詩となっている。これらのテクニックによって詩人は allusion の世界を作り上げている。詩人が allusion によって暗示する事柄は何かというと，ホメーロスの叙事詩に関わる様々な事柄である。従って，「アルゴナウティカ」は表面上アルゴナウタイの冒険の物語になっているが，allusion が指し示す処を解きほぐしてゆくと，その裏面にホメーロスの顔が浮き上ってくるという性格をもっている。ヘレニズムの詩人達はそのテクニックを縦横に駆使してホメーロスを模倣しそのオリジナリティーを競ったのである。ところで，彼らが allusion によって読者に示そうとした事柄のうち最も関心を寄せた事は何であったか。それはホメーロスの叙事詩研究の成果であった。彼等は優れたホメーロス学者でもあったのである。従って，彼等が詩の中に埋め込む研究成果は，ホメーロスの文法，語彙の解釈，テキストの読み，神話，を初めとして様々な問題に及んでいる。これらの問題の指摘と作者の解答はその詩の中に埋め込まれている。否，むしろ隠されていると言った方が良い。そしてそこにはヒントがやはり隠されている。これが allusion なのである。それ故，読者は作品を読みつつその中に様々なるホメーロス研究の課題と成果を見い出さなければならない。文学を鑑賞しつつ，且つ知的ゲームを満喫するというわけである。当然の事ながら読者はホメーロスに関する十全なる知識を要求される。これがヘレニズム時代の詩の特質であって，これ以外の何物でもないと言っても差しつかえはないであろう。

扨て，アポロニオスの詩は主としてホメーロスの語彙を使って作られている。しかし，使用語彙全体の約二割強が「非ホメーロス語彙」(Non-Homeric words) である。ホメーロスを模倣するに当ってアポロニオスは何故これ程多量の非ホメーロス語彙を使ったのか。その目的は何か。これが本研究のテーマである。この事については，既に別の場所で説明を試みたので多言を要しない*。しかし，要点を述べるなら，これら非ホメーロス語彙はホメーロス中の何らかの問題への allusion としてアポロニオスが使用した可能性がある。即ち，詩人が詩中に隠し入れた研究成果のヒント，いわば，キー・ワードになっているらしいのである。アポロニオスは当時第一流のホメーロス学者であったが故に扱われる問題も多様であると思われる。しかし，古代においてまたアポロニオスの時代にホメーロ

スに関してどのような議論が為されていたのかについての資料は乏しい。従って，僅かの事を手掛りにして仮説をたてる事しか出来ないのである。以下においては，一語一語について allusion が指し示す事柄が何であるかを解きほぐして行くつもりであるが，可能性を示すだけに留まることの方が多くなるかも知れない。しかし，「アルゴナウティカ」が叙事詩作品であると同時に，ホメーロスのコンメンタリーとしての一面を有する事，また，アポロニオスはホメーロスの叙事詩の中で問題が有ると考えた箇所を抽出して，これを材料にしてこの叙事詩，即ち，ホメーロスが扱ったのとは異る伝説圏の叙事詩を作ったのではないかという事もかなり説明出来るのではないかと考えている。

ἄψηκτος (3. 50)

3. 45-50

λευκοῖσιν δ' ἑκάτερθε κόμας ἐπιειμένη ὤμοις
κόσμει χρυσείῃ διὰ κερκίδι, μέλλει δὲ μακροὺς
πλέξασθαι πλοκάμους · τὰς δὲ προπάροιθεν ἰδοῦσα
ἴσχεθεν εἴσω τέ σφε κάλει, καὶ ἀπὸ θρόνου ὦρτο
εἷσέ τ' ἐνὶ κλισμοῖσιν · ἀτὰρ μετέπειτα καὶ αὐτὴ
ἵζανεν, ἀψήκτους δὲ χεροῖν ἀνεδήσατο χαίτας.

「女神は白い両肩に髪を垂らして，黄金の櫛で整え，長い髪を編もうとしていた。しかし，部屋の前に二人の女神を認めると，手を止めて彼女らを中へ招き入れ，椅子より立上って二人を寝椅子に座らせた。そのあとで自らも座ると，梳られていない髪を両の手で束ねた」

これはヘーラーとアテーナーがアプロディテーを訪問する場面の一節である。この場面は直ちに「イーリアス」の中のヘーラーの化粧の場面を想起させる。アポロニオスがこれを模倣してこの場面を作っていることは明らかである。

Ξ 175-7

τῷ ῥ' ἥ γε χρόα καλὸν ἀλειψαμένη ἰδὲ χαίτας
πεξαμένη χερσὶ πλοκάμους ἔπλεξε φαεινοὺς
καλοὺς ἀμβροσίους ἐκ κράατος ἀθανάτοιο.

「女神は美しい肌に油を塗りこめると，髪を梳ってから，手で輝やく髪を編み，その美しく香ぐわしい髪を不死なる頭より垂れ下らせた」

アポロニオスの模倣の仕方は oppositio in imitando である。ホメーロスでは，ヘーラーが髪の手入れをしてすっかり化粧を仕終えてからアプロディテーを訪問する事になっている。これに対して，アポロニオスでは，ヘーラーはアプロディテーが髪の手入れをしている最中に訪れる。しかも，アプロディテーは化粧を中途で止めるように場面は作り変えら

れているのである。

扨て，ここで問題としたいのは *ἀψήκτους*(3.50) という言葉である。これは非ホメーロス語であって，アポロニオス以前には一つの使用例しか文献中に残っていない。この言葉を使った彼の意図は何か。

Ar. Lys. 656-7

ἆρα γρυκτόν ἐστιν ὑμῖν ; εἰ δὲ λυπήσεις τί με,

τῷδε γ' ἀψήκτῳ πατάξω τῷ κοθόρνῳ τὴν γνάθον.

アポロニオス以外の唯一の例はこのアリストファネスの場合である。ここでは *ἀψήκτῳ* は革を形容する言葉として，「鞣してない」の意味で使われている。アポロニオスはこれを髪について使用しているのである。スコリアは次のように説明する。

Schol. A. R. 3.50 ; *ἀψήκτους · ἀκτενίστους*

即ち，「梳られていない」となる。これは文脈に適合する解釈である。ところで，アポロニオスの第50行はホメーロスの 176-7 行の非常に意識的な模倣となっている。そのことは，一語ずらしてこの二つの詩行を重ね合わせてみると良く分かる。

(Hom.) *χαίτας / πεξαμένη χερσὶ πλοκάμους ἔπλεξε*

(Ap.) *ἴξανεν, ἀψήκτους δὲ χεροῖν ἀνεδήσατο χαίτας*

ホメーロスでは文頭に置かれている *χαίτας* をアポロニオスは文末に置く。*πλοκάμους ἔπλεξε* は *ἀνεδήσατο χαίτας* となっており対応している。また，*χερσὶ* はより厳密に *χεροῖν* と双数に変えられている。更に言えば，*πλοκάμους - ἀνεδήσατο*, *ἔπλεξε - χαίτας* という対応も見られる。このように一語一語に対応関係を意識して作ったとすると，残りの *πεξαμένη* と *ἀψήκτους* の間にも対応関係があるのではないかと考えたくなる。この関係によってアポロニオスは何を言おうとしているのか。ホメーロスのスコリアには，*πεξαμένη* について次のような説明がある。

Schol. Ξ176a. 〈*πεξαμένη* :〉 *διακρίνασα καὶ διαχωρίσασα.*

(a. aliter D (*κτενισαμένη*))

πεξαμένη は「(髪を) 分ける」の意味とする。これは *ἔπλεξε* (編む) より推測される意味である。しかし，スコリアDは別の解釈を与えている。即ち，「梳る」(*κτενισαμένη*)である。この解釈は A.D. 一世紀頃のアポロニオス・ソピスタの編纂したホメーロス辞典の見解でもある。

Ap. S. 129, 30 *πεξαμένη · ὁ Ἀπίων κτενισαμένη, καὶ ὁ Ἀπολλόδωρος.*

これらの事より推測出来る事は，古代において，Ξ176 *πεξαμένη* の解釈は二つ有ったという事である。「(髪を) 分ける」と「(髪を) 梳く」の二つである。この事からアポロニオスが *ἀψήκτους* をホメーロスの *πεξαμένη* に対応させている点には或る意図が含まれていると推測し得るのである。アポロニオスは *πεξαμένη* に対して「梳かれていない」という

意味で *ἀψήκτους* を対応させている。前にも述べたように，ヘレニズムの詩人達はしばしばホメーロスを模倣するに際し逆の表現を用いるという特性を有する（oppositio in imitando)。ここの例も正にそれであって，アポロニオスは *ἀψήκτους* という言葉によってホメーロスの *πεξαμένη* に自分の解釈を与えていると考えて間違いはない。アポロニオスは，*πεξαμένη* は「(髪を) 梳く」と解すべきであるという見解をここで暗に示しているのである。

βληχρός (4. 152)

4. 152-3

οἷον ὅτε βληχροῖσι κυλινδόμενον πελάγεσσι

κῦμα μέλαν κωφόν τε καὶ ἄβρομον.

「さながら静かな海に黒い波が音もなくざわめくこともなくうねるときのように」

金の羊皮を守る大蛇の静かな動きを描写している場面の一節である。152行の *βληχροῖσι* という形容詞は抒情詩中に若干例が残っている（Pi. Fr. 130. 2, 245, Ba. 11. 65, 13. 227, Alc. θ̄1)。主として河の流れや風などの静かな動きについて使われている。この詩行では *ἄβρομον* (153) がホメーロス中の一節を想起させてくれる。この言葉はホメーロスの *ἅπλ. λεγ.* である。

N 39-41

Τρῶες δὲ φλογὶ ἶσοι ἀολλέες ἠε θυέλλῃ

Ἕκτορι Πριαμίδῃ ἄμοτον μεμαῶτες ἕποντο,

ἄβρομοι αὐΐαχοι.

「トロイア軍は一団となって炎の如く，また暴風の如くにプリアモスの子ヘクトールに隨っていった，ひたすら勢い込んで，騒音と叫び声を一つにして」

ἄβρομος を除けば二つの詩行には共通点が無いように見えるが，共に比喩が使われている事，比喩の対象がホメーロスでは人間（トロヤ人）であるのに対し，アポロニオスでは動物（大蛇）となっている事，比喩そのものは，一方は炎と風で，他方は海上の波になっている事，これらの事から両者の間には対比が見られるのである。ところで，*ἄβρομοι αὐΐαχοι* (N41) を仮に「騒音と叫び声を一つにして」と訳しておいたが，実はこの二つの言葉に関して古代に議論があったのである。即ち，「騒音もなく叫び声も立てず」と全く逆に解釈する考え方があった。スコリアは次のように記している。

Schol. N41a. *ἄβρομοι αὐΐαχοι : ὅτι ἀντὶ τοῦ ἄγαν βρομοῦντες καὶ ἄγαν ἰαχοῦντες, κατ' ἐπίτασιν τοῦ ᾱ κειμένου · ἑκάστοτε θορυβώδεις τοὺς Τρῶας παρίστησιν.*

41b. *ἄβρομοι αὐΐαχοι : φύσει γὰρ ὄντες θορυβώδεις τῇ νίκῃ πλεῖον θορυβοῦσιν. ἔλαβε δὲ τὸν μὲν βρόμον ἀπὸ τοῦ πυρός, τὴν δὲ ἰαχὴν ἀπὸ*

τῆς θυέλλης.

ἀντὶ τοῦ ἄγαν βρομοῦντες καὶ ἄγαν ἰαχοῦντες はアリスタルコスの解釈でもある。スコリアは *ἄβρομοι αὐΐαχοι* を，非常に騒々しい様子，として解釈している。また，ホメーロスにおいては，トロヤ人の騒々しさは常にアカイア人の静かさと対比されており，従って，トロヤ人達が勝利を目前にしてアカイア人達の船陣に押し寄せる時になって静かになると想像することは不可能である。嵐の比喩，人間の本性から考えても，二つの言葉は騒々しさを意味すると解釈するのが妥当である。これがスコリアの考えである。これに対して，アポロニオス・ソピスタには次のような説明がある。

Ap. S. p. 3, 6

"ἄβρομοι" σὺν βρόμῳ πολλῷ · ἄβρομοι αὐΐαχοι ἔλπονται δὲ νῆας Ἀχαιῶν αἱρήσειν. καὶ τὸ αὐΐαχοι μετὰ ἰαχῆς μεγάλης, ὡς ἀχανὲς πέλαγος τὸ μεγάλως κεχηνός. ὁ δὲ Ἀπίων ἤτοι ἄφωνοι καὶ ἥσυχοι ὡς ἂν παρατάξεως οὐχὶ γιγνομένης.

この記述によると，アピオーンは「音もなく静かな」と解したことになる。ヘーシュキオスはアピオーンに従っていると考えられる (*α*8275)。二つの対立する見解は，要するに，*ἄβρομοι αὐΐαχοι* の接頭辞 *α*- を集合的或いは繋辞的と解するか(アリスタルコスは強調の *α*- と解する)，否定の *α*- と解するか，に由来するのである。文脈は否定の接頭辞に対して否定的である。しかし，W. Leaf が指摘するように，否定の *α*- のみが一般的となった時代のギリシャ人には理解が困難であったのかも知れない。

扨て，アポロニオスの場合，ホメーロスの *αὐΐαχοι* と同じ詩行中の位置に *βληχροῖσι* を置いている。また，*ἄβρομον* を文末に置いている。これは意識的な作業である。*ἄβρομον* の意味は *κωφὸν* より明らかになる。これらの事から，アポロニオスは *βληχροῖσι* によってホメーロスの *αὐΐαχοι* の意味を示していると考える事が出来るのである。彼は *ἄβρομοι αὐΐαχοι* の *α*- を否定の接頭辞と解釈すべきであると言っているのか，或いは，このような解釈もあると言おうとしているのか，どちらかである。

δέσμιος (3. 203)

3. 200-203

Κίρκαιον τό γε δὴ κικλήσκεται · ἔνθα δὲ πολλαὶ
ἐξείης πρόμαλοί τε καὶ ἰτέαι ἐμπεφύασι,
τῶν καὶ ἐπ' ἀκροτάτων νέκυες σειρῇσι κρέμανται
δέσμιοι.

「(その野は) キルカイオンと呼ばれている。そこには多くの柳やこり柳の木が並んで生え，その梢から死体が縄で縛られて吊されている」

203行の *δέσμιοι* は悲劇中に多くの用例がある。アポロニオスはこれをここで一回使用するのみである。上記の詩行はコルキス人の奇習を語っている中の一節である。ここで，202—3行中の幾つかの言葉がホメーロスの或る箇所を想起させる。

Θ18-20

εἰ δ' ἄγε πειρήσασθε, θεοί, ἵνα εἴδετε πάντες·

σειρὴν χρυσείην ἐξ οὐρανόθεν κρεμάσαντες

πάντες τ' ἐξάπτεσθε θεοὶ πᾶσαί τε θέαιναι·

「さあ試してみるがよい，神々達よ，お前達皆が知るために。黄金の綱を天空より吊して，皆で摑まりなさい，男神達も女神達も」

実はアポロニオスは202～3行をホメーロスの19～20行を基にして作っているのである。一語一語対応させてみると分かる。*σειρὴν χρυσείην* (Hom.)～*σείρῃσι* (Ap.), *ἐξ οὐρανόθεν* (Hom.)～*τῶν... ἐπ' ἀκροτάτων* (Ap.), *κρεμάσαντες* (Hom.)～*κρέμανται* (Ap.), *ἐξάπτεσθαι* (Hom.)～*δέσμιοι* (Ap.), *θεοὶ... θέαιναι* (Hom.)～*νέκυες* (Ap.)。

この対応は更に一とひねりしてある。黄金の綱と単なる綱，天上と地上，能動態分詞と受動態の定動詞，動詞と形容詞，神々と人間の死体，という具合に。これは oppositio in imitando による意識的な模倣である。アポロニオスはこの模倣の中で何を言おうとしているのであるのか。スコリア中に次のような記述がある。

Schol. Θ18a. *τοῦτον δὲ καὶ τὸν ἑξῆς συνάπτει* Νικάνωρ·*εἰς δὲ τὸ κρεμάσαντες τελείαν τίθησιν.*

(cf. L. Friedländer, Nic. Il. p. 193, W. Leaf, ad loc.)

上掲のホメーロスのテキストは Monro-Allen (OCT) の校訂によるもので，一般的な読み方である。しかし，今引用したスコリアによれば，ニーカーノールは第18行と19行を一文章として，*κρεμάσαντες* の後に句読点を打って読むべきであると考えたのである。古代には Θ18—19行に関して句読点をどこに打って読むべきかという議論があったと言えよう。ニーカーノールに従うとテキストは次のようになる。

εἰ δ' ἄγε πειρήσασθε, θεοί, ἵνα εἴδετε πάντες,

σειρὴν χρυσείην ἐξ οὐρανόθεν κρεμάσαντες·

πάντες τ' ἐξάπτεσθε θεοὶ πᾶσαί τε θέαιναι·

W. Leaf はニーカーノールに従ってこのように読むが，その際第20行の *τ'* を *δ'* と読み替えるべきであるとする。このように句読点を置くと *πειρήσασθε* が分詞 *κρεμάσαντες* を伴う事になり，「綱を吊して試みよ」と訳される。

アポロニオスがこの詩行の模倣によってこの問題を取り上げていると仮定すると *δέσμιοι* という非ホメーロス語をここに使用した理由も説明がつくように思われる。A. R. 3. 202-3 は，Θ19-20 に対応している。その中でも *κρεμάσαντες* /... *ἐξάπτεσθε* (Hom.) と

κρέμανται / *δέσμιοι* (Ap.) の対応に注目しなければならない。アポロニオスの202行に始まる関係文は203行の *δέσμιοι* で終っている。従って彼はホメーロスを19～20行を一文章と読んだと推定されるのである。即ち，Monro-Allen と同じ読み方である。アポロニオスの *δέσμιοι* という言葉はこの事を説明するように思える。つまり，第20行を第19行につなげて読むべきであることを *δέσμιοι*（「結ばれる，縛られる」）で暗に示しているように見えるからである。詩人のユーモアとでも言うべきであろう。

δυσπαλής (4. 52)

4. 50-53

ἔνθεν ἴμεν νηὸν δὲ μάλ' ἐφράσατ' · οὐ γὰρ ἄιδρις
ἦεν ὁδῶν, θαμὰ καὶ πρὶν ἀλωμένη ἀμφί τε νεκροὺς
ἀμφί τε δυσπαλέας ῥίζας χθόνος, οἷα γυναῖκες
φαρμακίδες ·

「彼女はそこから神殿へ行こうと考えた。その道を知らなかったわけではなく，前にもしばしば死体や毒のある（草の）根を求めてさまよったからである，魔法使いの女達がするように」

δυσπαλέας ῥίζας (52) は普通このように「毒のある根」と解されている。*δυσπαλής* の使用例は二つ残っており，共にピンダロスにある (*δυσπαλές*, Pi. O. 8. 25, P. 4. 273)。「あらがい難い」の意である。これはアポロニオスの場合と全く異る意味であって，L-S. もこの二つの異った意味を挙げている。この相違は全く語源上の問題であって，(A) *πάλη,ἡ* (= wrestling)< *παλαίω* (=to wrestle) と (B) *πάλη, ἡ* (=the finest meal)< *παλύνω* (=to make porrige by sprinkling meal in water or other liquid) にそれぞれ由来している。この *πάλη* に *δυσ-* が付された合成語である。アポロニオスが *δυσπαλής* を使用した理由は二通り考えられよう。一つは，一般に (A) に由来する意味で使われていた *δυσπαλής* に加えてアポロニオス自身が語源的理由から (B) に由来する意味を発堀して使用したと考える事である。というのは，この意味で使用される例はアポロニオスのこの例証以外に無いからである。第二の理由として何が考えられるか。スコリアには次のように記されている。

Schol. A. R. 4. 52　*ἀμφί τε δυσπαλέας : χαλεπὰς καὶ κακάς. ἢ τὰς ἐπὶ κακῷ ἀναδιδομένας ἐκ τῆς γῆς · πλείονα γὰρ τῶν σωτηρίων τὰ φθοροποιά. ἢ τὰς δυσχερῶς σινομένας.*

この記事から G. W. Mooney は *δυαπαλέας* の意味は，"noxious (*χαλεπὰς καὶ κακάς*)" なのか，"tough, hard to uproot (*δυσχερῶς σινομένας*) なのか決定しかねている。しかし，どちらかと言えば後者の可能性が強いと考えているようである。一見したところ文脈には「毒のある」の意味の方が適合する。従って一般にはこのように訳されるのである。

しかし，ここにはいわゆる「アポロニオスの罠 (Apollonius' trap)」が仕掛けられているのではないかとも思われるのである。つまりクイズのようなものである。アポロニオスは，このような問題を詩中に植め込む場合，その解答も何処かに隠しておくのである。メディアが使う薬草についての描写は第三歌にある。

A. R. 3. 854-7

τοῦ δ' ἤτοι ἄνθος μὲν ὅσον πήχυιον ὕπερθεν
χροιῇ κωρυκίῳ ἴκελον κρόκῳ ἐξεφαάνθη,
καυλοῖσιν διδύμοισιν ἐπήορον · ἡ δ' ἐνὶ γαίῃ
σαρκὶ νεοτμήτῳ ἐναλιγκίη ἔπλετο ῥίζα.

メディアが薬草を採集する場所は「オデュッセイア」中のキルケーの館の周辺，薬草の生い茂っている場所に対応する。アポロニオスの 3. 854-7 と 4. 50-3 はホメーロスに基づいて作られていると考えられる。

κ 302-6

ὡς ἄρα φωνήσας πόρε φάρμακον ἀργειφόντης
ἐκ γαίης ἐρύσας, καί μοι φύσιν αὐτοῦ ἔδειξε.
ῥίζῃ μὲν μέλαν ἔσκε, γάλακτι δὲ εἴκελον ἄνθος ·
μῶλυ δέ μιν καλέουσι θεοί · χαλεπὸν δέ τ' ὀρύσσειν
ἀνδράσι γε θνητοῖσι · θεοὶ δέ τε πάντα δύνανται.

「その時アルゴス殺しの神はこのように声をかけて（私に）薬を与えてくれました，大地より引き抜いて，そしてその性状を教えてくれました。その草の根は黒く，花はミルクに似た色をしていました。神様方はこれをモーリュと呼んでいます。しかし人間共には堀り取ることは困難です。だが神様方は何でもお出来になるのです。」

これはオデュッセウスの冒険談中の一節である。この詩行中の304行を基にしてアポロニオスが 3. 854-7 を作っていることは明らかである。*κ* 304 *ῥίζῃ μὲν μέλαν ἔσκε, γάλακτι δὲ εἴκελον ἄνθος*～A. R. 3. 854-7 *ἄνθος . . . / χροιῇ κωρυκίῳ ἴκελον κρόκῳ . . . / . . . / σαρκὶ νεοτμήτῳ ἐναλιγκίη ἔπλετο ῥίζα*. オデュッセウスが受け取った薬草の根は有毒ではない。ところで，アポロニオスが *κ* 302-6 を基にして二つの場面を作ったと仮定すると，*δυσπαλέας ῥίζας χθονός* (4. 52) は *κ* 305-6 *χαλεπὸν δέ τ' ὀρύσσειν/ἀνδράσι γε θνητοῖσι* に対応すると考えられないであろうか。そうだとすると，*δυσπαλέας ῥίζας χθονός* は *κ* 305-6 によって解釈する事も可能である。即ち，「(人間の力では)大地より堀り取ることの出来ない根」という意味になる。従って，アポロニオスのクイズの解答は「オデュッセイア」中に隠されているということになろう。

ἐύστολος (1. 603)

1. 601-4

ἦρι δὲ νισσομένοισιν Ἄθω ἀνέτελλε κολώνη

Θρηικίη, ἣ τόσσον ἀπόπροθι Λῆμνον ἐοῦσαν

ὅσσον ἐς ἔνδιόν κεν <u>ἐύστολος</u> ὁλκὰς ἀνύσσαι,

ἀκροτάτῃ κορυφῇ σκιάει καὶ ἐσάχρι Μυρίνης.

「そして明け方に，彼等の行く手にトラキアのアトス山の頂きが水平線上に昇った，この山は装備の整った商船が達するのに夕方までかかるほどレムノス島から離れていて，最も高い峰の影をこの島のミュリネまで投げかける」

603行の *ἐύστολος* はソフォクレスに一回だけ使用例が残っている。

S. Ph. 516-8

ἐπ' εὐστόλου ταχείας

νεὼς πορεύσαιμ' ἂν ἐς

δόμους, τὰν θεῶν νέμεσιν ἐκφυγών

これは船乗り達がネオプトレモスに，フィロクテテスを送ってはどうかと提案する場面である。アポロニオスがこの箇所を利用したかどうかは分らないが，*ἐπ' εὐστόλου ταχείας/ νεὼς πορεύσαιμ' ἂν* (Soph.) と *κεν ἐύστολος ὁλκὰς ἀνύσσαι* (Ap.) は構文上に類似している。ところで，ここで問題とするのは，アポロニオスが何の目的で非ホメーロス語 *ἐύστολος* を使っているのかということである。詩人はホメーロスの次の詩行を想起させようとしているようである。

δ 354-7

νῆσος ἔπειτά τις ἔστι πολυκλύστῳ ἐνὶ πόντῳ

Αἰγύπτῳ προπάροιθε, Φάρον δέ ἑ κικλήσκουσι,

τόσσον ἄνευθ' ὅσσον τε πανημερίη γλαφυρὴ νηῦς

ἤνυσσεν, ᾗ λιγὺς οὖρος ἐπιπνείῃσιν ὄπισθεν.

「さて絶え間なく轟く海中に島があります，アイギュプトスの前方ですが，これをパロスと人々は呼んでおり，内側の空ろな船が一日かかって達するほど陸から隔たっています，それも順風が後ろから吹く時のことです」

これは構文上アポロニオスの詩行に非常に類似している。類似点を対応させてみると，

*δ*356　*τόσσον ἄνευθ' ὅσσον*～A. R. 1. 602/3 *τόσσον ἀπόπροθι... /ὅσσον*

356　*πανημερίη*　～　603　*ἐς ἔνδιον*

356　*γλαφυρὴ νηῦς*　～　603　*ἐύστολος ὁλκὰς*

357　*ἤνυσσεν*　～　603　*κεν... ἀνύσσαι*

となる。アポロニオスはホメーロスを模倣しているのである。この模倣のポイントは何かというと，*ἤνυσσεν* が *κεν... ἀνύσσαι* になっている点である。これは何故か。ホメーロス

の註釈家達は *ἤνυσσεν* を時間と関わりのない Gnomic Aorist と説明する。即ち，一般的真理或いは習慣的行為を示すアオリストである(W. B. Stanford, Heubeck-West-Hainsworth, cf. Monro, Homeric Dialect, p. 67. Chantraine, Gram. Hom. ii p. 185)。更に，Ameis-Heutze-Cauer は，ギリシャ人は経験より引き出された推論を暗黙のうちに理解したのであって，このアオリスト *ἤνυσσεν* は zurücklegen kann と解釈すべきであるとしている（他の例については，cf. Chantraine, op. cit.)。アポロニオスが *κεν... ἀνύσσαι* と書いているのは正にこの点を指摘していると考えられるのではなかろうか。つまり，彼は，ホメーロスの *ἤνυσσεν* は，*κεν*＋希求法(potential optative)と解すべきであると考えたのか，或いはホメーロスは *κεν ἀνύσσαι* と書くべきであったと考えたのである。いずれにせよ，ここでの模倣の目的は *ἤνυσσε* に関する文法上の問題の指摘であろう。それでは *ἐύστολος* は何故使われているのか。勿論，読者の注意を引くためであるが，同時にここには彼一流のアイロニーが込められている。即ち，*ἐύστολος ὁλκάς*「装備の整った（近代的な）商船」ならば一日でこの目的地に達する事も可能であろうが，*γλαφυρὴ νηῦς*「内側の空ろな（前近代的な）船」では難かしかろう，と詩人は皮肉を言っているのである。

＊「アポロニオス・ロディオスの非ホメーロス語彙」(「西洋古典学研究XXXVII」岩波書店，1989年3月発行予定)